（様式２）

委 員 会 視 察 報 告 書

委　員　会　名	文教厚生常任委員会

視　　察　　地	大阪府大東市
調　査　項　目	切れ目のない寄り添い方の子育て支援 子育て世代包括支援センター「ネウボランドだいとう」視察
調　査　目　的	妊娠・出産～青年期の各段階を経て、大人になるまでの相談支援体制
日　　時	令和７（２０２５）年１０月２８日（火）１４：３０～１６：３０
場　　所	・大東市役所（大阪府大東市谷川１丁目１番１号） ・大東市子育て世代包括支援センター「ネウボランドだいとう」 （大阪府大東市幸町８番１号）
調　査　概　要	【大東市こども家庭センター（ネウボランドだいとう）の説明】 １．大東市の現状とネウボランドだいとう設置の経緯 ・大東市は令和 7 年 3 月末で人口 115,377 人。令和 6 年度の出生数は 667 人で、全国と同じく年々出生数は減少している現状 ・乳児全戸訪問としてハローベビー訪問事業を行っており、全ての家庭を対象としているが、こちらの利用者も減少傾向にある。 ・相談件数自体は増えており、特に妊産婦の相談が増加している。 ・平成 30 年 8 月からネウボランドだいとうを開設。子育て家庭総合支援拠点が子育て世代包括支援センターを包含。子ども室と地域保健課、教育委員会の 3 部局で連携し、部課をまたいで運営 ・令和 6 年 4 月から既存のネウボランドだいとうの機能を残しながら、こども家庭センター化し、センター長をトップとし、その下に統括支援員を配置し、窓口、指揮・命令を一本化 ・統括支援員に情報を集約し、情報の一元化、情報共有で切れ目ない支援。子育てしやすい環境整備をし、一歩先を目指し、「子育てするなら大都市よりも大東市」をキャッチコピーに取り組んでいる。 ２．ネウボランドだいとうについて ・来所の敷居を低くするために、まずは市役所らしさをなくそうと、最初に職員が壁面を緑色に塗り替えた。フィンランドのネウボラをヒントに創設したことから、北欧らしさを表すために、床にじゅうたんを敷いたり、地元の家具屋とコラボし木製の家具にしたり空間を整えた。 ・オリジナルデザインを大阪産業大学の学生に依頼し、壁面にもイラス

	トを描いてもらい、イマドキっぽさも取り入れた。 ・広報誌での特集ページやイベントの PR に加え、インスタグラムを開設。また、ネウボラサポーターとして、市民から登録してもらい、イベントの運営などボランティアとして一緒に活動してもらいながら、周知を強化した。 ・来てもらうきっかけとなるような、季節に合わせた壁面装飾や、ハロウィン等のフォトスペースを作ったり、ペタペタアートなどイベントも定期的に開催したりしている。 ・相談がなくても来所してもらえるように、身長・体重計を置き、いつでも計測可能とした。いつでも計測を始めてから、来所者数は、R1 年が 575 人だったのが、R5 年は、1,361 人と年々増加。ＰＲの強化を図ってきたこともあり、この場所を知ってもらうのに 5 年掛かった。これにより、相談件数も 242 件から 724 件と増加 ・相談や来所から、近年、外国の方が増えてきていることで同じ境遇の人と話したいとの要望からベトナム会を立ち上げた。また、転入者の会、双子の会など、3 つの部署が集まったことで、当事者の声を反映させた会を立ち上げるなどの支援ができるようになった。 ・保健医療部地域保健課では、母子保健グループとして、保健師、助産師、公認心理士を配置。福祉・子ども部こども家庭室とで連携していたが、そこへ教育総務部家庭・地域教育課とも連携を図り、施設内へスクールソーシャルワーカーを交代で配置している。 ・妊娠、出産から 18 歳まで、子育て世代全数を対象 ・ネウボランドだいとうの支援を川上と川下に例えると、川上＝母子保健、川下＝児童福祉。川上と川下では、それぞれの場所でやらなければならない仕事をしてはいるが、見ている景色が違う。それを上から俯瞰するのが統括支援員の役割。それぞれで、何が起こっているのか適切に把握し連携できるよう助言し、より効果的な援助ができるようにしている。 ・困っている人に対してできるだけ早い時期にスピーディーな介入ができるよう、SOS をすぐに出せる関係性を早くから築けるよう心掛けている。 ・令和 7 年 4 月から利用者支援事業を開始。新規で、妊婦等包括相談支援事業（助産師 2 名を地区担当制で配置。妊娠中からの妊婦面談やサポートプランの作成。保健師の地区担当や心理士との連携・協働し支援を行う。）、子育て世帯訪問（訪問支援員が、家事・子育てに対して不安・負担を抱えた子育て家庭、妊産婦、ヤングケアラー等がいる家庭の居宅を訪問し支援を行う。ヤングケアラーへの対応として、訪問時間の延長も行っている。）、サポートプラン作成も開始

	・ネウボランドだいとうでは、３部局の体制であり、２人３脚より更に難易度の上がる３人４脚の体制で支援を行っている。３課での連携は難しい部分もあるが、紆余曲折しながらも前に進んでいるところである。
視察の様子	 大東市役所にて説明を受ける ネウボランドだいとう内の現地視察 ネウボランドだいとうが入っているすこやかセンターにて
質疑応答	**質問１　ネウボランドだいとうでは、妊娠期から青年期への支援とあるが、その前の段階、結婚についての取組は行っているか。** 回答１　大東市でも、結婚支援をどうするかという議論は時々出ているが、結婚が子育てへつながるか結論がでていない部分もあり、本格的な支援は行っていない。 **質問２　発達障害のあるこどもたちは、ここで対応されているのか。** 回答２　こども家庭センターの外に子ども発達支援センターがあり、発達障害のお子さんは、そこで専門職が対応している。

	質問３　重層的な支援体制はどのようにされているのか。 回答３　福祉政策課が全体統括。他の課や社協とも連携し、個々の課題に応じて様々な課が連携し、それぞれの課の福祉施策を持ち寄り対応。現在、体制の強化を図っている。 **質問４　対象が成年までとなると、教育現場との関係性が重要となってくるが、情報共有の仕方をどのようにされているのか。** 回答４　小学校に配置されているスクールソーシャルワーカー（SSW）を、こども家庭センターの中に１名配置し情報共有。SSW は小学校での活動が主のため専任ではなく曜日ごとに交代し、小学校から高校までの生徒に対する相談に対応。体験が限られている児童・生徒に対しては、体験活動などを通した仲間づくりができる、安心して自分を出し受け入れてもらえるような第三の居場所を整備し提供している。 **質問５　統括支援員はどういう方で、どのような対応を行っているか。** 回答５　令和６年度は、保健師の資格を持つ職員が担当。令和７年度は、介護福祉士の資格を持つ児童福祉のケースワーカーも行っていた職員が担当。統括支援員は非常に重要なポジションであり、母子保健と児童福祉の両面から見ながら様々な専門職と連携し議論する必要があるが、人材確保が課題 **質問６　周知やＰＲ、保護者の声を聴く工夫は。** 回答６　公式 Instagram を開設し、出生届の窓口で登録を推進。様々な場面で二次元バーコードを持参し登録を推進中。興味・関心を持ってもらえる発信を心掛け、子育て世代に人気の料理家を招いた講演会を開催するなど工夫している。 **質問７　助産師２名、地区担当制で配置しているが、２名で対応は十分行えているのか。人材確保はどのようにされているか。**

	回答７　地域保健課に助産師が配置されている。何とかして２名を確保している状況。保健師や保育士も一緒になって対応している。 **質問８　ネウボラサポーターはどんな人がなっているのか。** 回答８　ネウボランドだいとうからイベント時等に呼び掛け、子育て中の保護者や子育てを終えた方に登録してもらい、イベントの手伝い等をボランティアで行ってもらっている。イベントの企画・運営や会議の参加なども検討中
委員会所感	**【山本博文】** 切れ目のない寄り添い方の子育て支援については、妊娠期から１８歳までの子どもを育てている家庭を対象とした母子型・基本型の利用者支援を担う子育て相談の総合窓口として、子育て世代包括支援センター「ネウボランドだいとう」を開設した。機能としては、センター長をトップとし、その下の統括支援員（保健師）を配置し、窓口、指揮・命令を一本化し、子育てしやすい環境整備を図り一歩先を目指し、「子育てするなら大都市より大東市」をキャッチコピーに取り組んでいた。「ネウボランドだいとう」を直接視察した。来所の敷居を低くし役所らしさをなくそうと、最初に職員が壁面を緑色に塗り替えて、北欧のフィンランドのネウボラをヒントに床にじゅうたんを敷いたり、地元の家具屋さんとコラボした木製家具を置いた空間を整えてあった。特に、虐待や貧困などに対する支援を行うために保育園や教育委員会、福祉課、医療機関、警察などと連携を行っていた。また、柏崎市が現在行っている子育て応援券と同様な「子育てスマイルサポート券」の申請率及び利用率も柏崎市と同様に高く、今後も調査研究をしていきたい。 **【池野里美】** ネウボランドだいとうを立ち上げる際に、3 課で部課をまたいで連携して支援する体制を取ってきたが、令和６年の国の方針を受け、こども家庭センターとして、センター長をトップに、統括支援員を配置し、相談窓口や指揮・命令を一本化した。子どもを取り巻く問題が、複雑化・多様化する昨今において、切れ目のない支援を行うために、こども関係の部署だけでなく、福祉の部署と教育委員会も加わった体制を整えているのは素晴らしいと感じた。大東市では、全小学校にスクールソーシャルワーカーを配置しているが、その中から交代でネウボランドだいとう内にも１名配置。それ以外にも、保健師、助産師、保育士、公認心理士、こども家庭支援員など、様々な専門員を配置し手厚い支援を行っている。

	窓口を一本化することで市民としては相談しやすいが、統括支援員として対応に当たる職員の負担は相当ではないかと感じるので、この点については引き続き調査・研究していきたい。 柏崎市では、スクールソーシャルワーカーの配置をしていないが、やはり、教育現場において福祉の視点からも支援ができる人材がいることは、子どもや保護者に対して寄り添った支援ができるだけでなく、教師にとってもいい学びになると感じるので、柏崎市での導入を求めたい。 実際に施設を見学し、誰でも来やすい雰囲気にするため、まずは、「役所らしさをなくそう」と壁を緑色で職員が塗り替えたり、地元の家具屋とコラボした温かい木製に変えたり、地元の大学生とコラボして施設のロゴを作ってもらったり、壁にかわいいイラストを描いてもらうなど工夫されていた。また、定期的にイベントを行い、市民サポーターを募って一緒にイベントを盛り上げ、SNS も活用しながら施設の周知・啓発にも取り組まれていた。市民や民間とも連携しながらいつでも気軽に来てもらえる場となるような空間づくりや体制からは、柏崎でも取り入れられる部分も多く、とても参考になる視察であった。 **【三嶋崇史】** 「子育てするなら大都市よりも大東市」とても目を引くキャッチフレーズには、妊娠から１８歳までの子育て全世帯を対象に切れ目のない子育て支援を行っている大東市の優先度、重点施策であることが分かる。また、重層的に情報共有、収集をすることで、アセスメント・プランを立てやすく、支援が適切に実施されているかを検証、改善につなげることができる。 ネウボランドだいとうは、子育て支援の拠点としてライフステージに見合う子育てをサポートする市の施設で、有資格者が丁寧に相談の対応をしてくれるために、子育て世代の心の支えとなっている。年々利用者が増加傾向にあり、市民に親しまれていると感じた。 窓口を一本化することで、利用者の負担を軽減していること、子育て世代が利用しやすい環境づくりに力を入れていることは、本市の取組に反映できる点として調査研究を進めていきたい。 **【田邉優香】** 大阪府大東市の「ネウボランドだいとう」は、妊娠期から 18 歳までを対象にした切れ目のない子育て支援を実現する総合窓口であり、保健・福祉・教育の連携体制が整っていた。北欧のネウボラを参考にした温かみのある空間づくりや、関係機関との連携による虐待・貧困への対応など、実践的な支援が印象的だった。また、「子育てするなら大都市より大

	東市」というキャッチコピーに地域の覚悟と誇りを感じた。不登校支援教室「Voice」など教育分野との接続も進められており、子育てと教育を一体として捉える視点の重要性を再認識した。柏崎市の施策と照らし合わせながら、今後の支援体制の深化に生かせるよう調査研究を更に進めたい。 **【持田繁義】** 市民の声に寄り添う、市民の声が生きる、市民との伴走型の自治づくり。市民力と地域力を育む責任ある自治力の向上を育む。少子化が進む一方で複雑化が見えるなか、住民福祉向上を柱に、市のオリジナル事業の進展と相談体制を充実することなど、基礎自治体としての本気度が試されている。こども家庭センターを設置、通称「ネウボランドだいとう」として、まずは「市役所らしさをなくそう=来所の敷居を低く」を基調・指針としていること。市民に寄り添い総合的にその家庭へ支援する意気込みは優れている。 **【重野正毅】** 第一声としての「子育てするなら大都市よりも大東市」というフレーズに心をひかれた。 「ネウボランドだいとう」として保健医療部、福祉・子ども部、教育総務部など多くが連携して統括支援員の下対象児、対象家庭と向き合っていること、また、子どもの貧困や発達障害、虐待あるいは重層的支援が必要な場合はそれぞれの部署につないでいく体制があること、さらに、学校教育や機能不全家庭などへの情報共有の在り方も深化させていることなど、学ぶところが少なくなかった。その中で課題としては学校現場との連携にやや温度差があることを挙げていた。 市役所から少し離れたところにある「すこやかセンター」の中にある「ネウボランド」の現場を見学したり、その施設の前の「キッズプラザ」の中にある「Voice（不登校の適応指導教室）」についての説明を聞き、大東市及びそこに勤める職員の熱意と使命感を感じた。同様の施設がある柏崎市の子育てや不登校を含めた教育環境の整備についても素晴らしい取組なのだと改めて感じた。その上で、子育ての同一線上に学校教育があることも忘れてはいけない視点だと思った。 **【相澤宗一】** 「子育てするなら大都市より大東市」というキャッチコピーの下、大東市では妊娠期から 18 歳までの子どもと家庭を対象に、切れ目のない支援体制を構築している。子育て世代包括支援センター「ネウボランド

	だいとう」では、保健医療、福祉、教育等の関係部署が連携し、統括支援員（保健師）の下、母子型・基本型の支援を一体的に実施している。施設は北欧のネウボラ（アドバイスの場）を参考に、温かみのある空間づくりを行い、来所しやすい雰囲気を整備していた。また、貧困、虐待、不登校など複合的な課題に対しては、教育委員会、保育園、医療機関、警察等と連携を図る体制を確立していた。職員の熱意と使命感が随所に感じられ、柏崎市の取組と共通点も多く、子育て支援と学校教育を一体的に推進する視点の重要性を再認識した。